

水滴

MEDORUMA SHUN

目取真俊

水滴

目取真俊

工业学院图书馆
藏书章

著者紹介

一九六〇年沖縄県生まれ。琉球大学法文学部卒業。八三年、「魚群記」で第一一回琉球新報短編小説賞。八六年、「平和通りと名付けられた街を歩いて」で第二一回新沖縄文学賞。九七年、「水滴」が第二七回九州芸術祭文学受賞ののち、第一一七回芥川賞を受賞する。

水滴

一九九七年九月三十日第一刷

（定価はカバーに
表示してあります）

著者 目取真俊

発行者 和田宏

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二
電話代表〇三三二六五一一二二

印刷所 大日本印刷

製本所 加藤製本

万一、落丁乱丁の場合は送料当方負担でお取
替え致します。小社営業部宛お送り下さい。

目次

水滴 5

風音 51

オキナワン・ブツク・レヴェー

装 幀 芦澤泰偉
水滴画 西口司郎
口絵写真 田中茂

水滴

水滴

徳正とくよしの右足が突然膨れ出したのは、六月の半ば、空梅雨の暑い日差しを避けて、裏座敷の簡易ベッドで昼寝をしている時だった。五時を過ぎて少しは凌ぎやすくなっており、良い気持ちで寝ていたのだが、右足に熱っぽさを覚えて目が覚めた。見ると、膝から下が腿より太く寸胴ずんどうに膨れている。あわてて起きようとしたが、体の自由がきかず、声も出せない。ぬるりとした汗が首筋を流れた。脳溢血でも起こしたのか、と思ったが、頭に違和感はなく、意識もはっきりしている。天井を見つめて思案している間にも、足はどんどん膨れていき、すべすべと張りつめた皮膚に蟻の這うようなむず痒さが走る。掻こうにも指先一つ動かすことができず、胸の内で悪態をついていると、半時間ほどして妻のウシが起きにきた。陽もやわらぎ始めたので畑仕事に出ようと呼びにきたのだった。

すでに中位の冬瓜すふいほどにも成長した右足は生っ白い緑色をしていて、ハブの親子が頭を

並べたような指が扇形に広がっている。まばらな脛毛が卑猥な感じだった。

「ええ、おじい、時間ど。起きみ候れ」

肩を揺すると枕から頭が落ち、空ろに開いた目と口から涙とよだれが垂れ落ちた。

「あね、早く起きらんな」

いつものように仕事を怠けようと寝た振りにしていると思い、鼻をつまむというより、もぎ取るような勢いでひねりあげたが、何の反応もない。不審に思つて全身を見渡したウシは、それまで近所の誰かが置いていってくれた冬瓜とばかり思つていたものが、徳正の右足だと気づいた。

「呆氣さみよう！ 此の足や何やが？」

恐る恐る触つてみると、少し熱っぽいが、しっかりとした固さがあつた。

「はあ、この怠け者が、この忙しい時期に異風な病氣なりくさつて」

畑の草取りから山羊の餌の草刈りまで、一人でやらないといけないと知つて腹が立ち、こんな変な病氣になるのも、歌、三味線、博打に女遊びと好き勝手にやっているからやさ、と脛のあたりを思い切り張つた。徳正は目をむいて氣を失つたが、パチーンという小氣味よい音が響くと同時に、膨らんだ足の親指の先が小さく破れて、勢いよく水が噴き出した。

ウシはあわてて足先をベッドの横に出し、踵から垂れ落ちる水を水差しに受けた。最初の勢いは衰えたが、間断なく落ちる液体はどうみても水だった。

「珍しい事もあるものやさ」

親指の皮の破れ目から盛り上がっては滴り落ちる水の玉を見ていたウシは、ふと好奇心に駆られて、そっと指先を濡らして舐めてみた。糸瓜の水のような青くさく淡い甘味があった。血でも汗でも尿でも、人の体から出るものは辛いものやしが、と思いながら、ウシはゴム草履を突っかけて、診療所の医者を呼びにいった。

徳正の足の噂は、翌日の朝には村中に広がっていた。昼には見舞いにかこつた見物人が門の前に列を作り、五十メートル程の長さになった。村に行列ができるのは、終戦直後の米軍の配給の時代以来だったから、関心のなかった者も並ばずにはおれなくなった。最初は礼を言いながらお茶や菓子を出してたウシも、アイスクリン売りまで出るに及んで、「何が、我っ達徳正や見せ物るやんな？」

と怒り出し、納屋から鉈を持ってきて振り回し始めた。「仕事もせん遊び人」と罵ってばかりいても、ウシが徳正をどれだけ頼りにしているか知っている村人達は、ここで物言いしようものなら本気で切りつけられると一散に逃げ出した。

ウシが家の内に消えると、共同売店前のガジマルの木陰や公民館の軒下、クワデイサーが枝を広げるゲートボール場横のベンチのあたりに自然と人が集まり、見舞いにいつて実際に足を目にした者を中心に話がはずんだ。足の形や色艶、におい、固いのか軟らかいのか、爪の変形の具合や過去に村で起こった局部肥大症の症例の数々が話され、吉兆か凶兆か、という予想から、何日で腫れが引くかという賭けが始まる。村の財政に及ぼす経済効果に話が広がった頃から夕暮の気配になって酒が入った。たちまち歌・三味線が始まり、踊りに空手と盛り上がると、次の村会議員選挙を狙っている者が山羊を潰し、その対立候補と噂されている者が酒を買いに息子を走らせる。売り物にならなかったマンゴーやパイロンが皮を剥かれ、甘ったるい匂いが鯖缶やチギリイカの匂いに混じり、子供たちは爆竹を鳴らし、女達は山羊汁の鍋の火に顔を火照らせ、青年たちは浜に下りて潮の揺れに合わせ体を重ね、豚の肋骨をくわえた犬達が村中を走り回った。

「人の心配は分かん痴れ者達ふりせんたが」

窓から騒ぎをうかがっていたウシはこぶしで殴るふりをし、徳正が寝たままのベッドに戻って足の水を替えた。村の神事にもかならず参加し、祖先の供養も欠かしたことのない自分が、「何でこんな哀れをしないといけんかね」と嘆かずにはおれなかった。徳正は微

熱があるくらいで脈にも異常はなく、軽くいびきをかいて気持ち良さそうに寝ている。右足はすでに一抱えはある大振の冬^{すぶい}瓜^いくらいになっている。剃刀でちゃんとやってみたい誘惑にも駆られたが、このまま意識が戻らないことを考えると、気の強いことでは村人の誰もが一目置くウシもさすがに不安になった。親指の先から漏れる水は、一秒置きくらいに規則正しく落ち続けている。ウシはベッドの下に置いたバケツを交換し、溜まった水を裏庭にぶちまけた。

診療所の医師は大城というまだ三十代半ばのやさ男で、人当たりもやわらかく老人連中に人気があった。大城は困惑した表情を隠せないまま血圧を測り、採血や触診を行なったが、病名を告げることはできなかった。街の大学病院に入院して精密検査を受けることを勧められたウシは反射的に、「ならんど」と叫んだ。「ダイガクビョーインに入ると最後だ」というゲートボール仲間の言葉を信じ込んでいるウシは、何度説得されても聞かなかつた。踵から落ちる水を小瓶に入れてカバンにしまいながら大城は、明日にも精密検査を受けるようにと繰り返し、定期的に回ってくることを約束して帰っていった。

子供の無いウシと徳正は、四十年近く農業をしながら二人きりで暮らしてきて、どちらかが欠ける生活など考えたこともなかった。命に別状はない、と無理にも思ったウシは、

しばらく家で様子を見ることに決めて、騒がしい村の連中を追っ払うために納屋に鉋を取りに行った。

翌日から、大城は日に二回往診に来てくれた。合間には看護婦が点滴の交換や着替えの手伝いに来てくれたので、ウシは短時間ではあれ畑の様子を見に行くことができた。

「大学病院に勤めている友人に頼んでおいた検査の結果が出ましたよ」

と大城が言ってきたのは、徳正の足が腫れて四日目の午後だった。大城は縁側に座り、ウシの出した大根の黒糖漬けをこりこり食べながら、細かい数字の並んだ用紙を示した。

「要するに、ただの水ですね。少し石灰分が多いようですが」

ウシは、何でその水が足の先から出るのか訊ねた。

「さあ、それが不思議なんですよ」

人のよさそうな笑顔で言うのを、それが分からんで何のために医者をやってるか、とどやしつけてやりたい気持ちだったが我慢して、

「理由は分からんでもいいから早く止めてくれませんかね」

と頼んだ。そのためには大学病院に入院させるしかない、と大城は繰り返した。「ダイ

ガクビョーインでは年寄りの病人を実験材料にしている」と老人会の戦跡地巡りの観光バスの中で聞いていたウシは、「糞くその役にも立たんさや」とつぶやいて、空になった皿を片付けた。大城は「はあ？」と聞いたが、ウシは笑って礼を言い、自分で治すしかない心に決めた。

最初、ウシは徳正がフィラリアにかかったのかと思った。ウシが子供の頃までは、松の切り株のような足を引きずったり、禪からはみ出した種豚のようなころも辜丸をぶらつかせて歩いている者が村に何名かいた。中でも村々を回って修理屋をしていた一輪車おじーは有名だった。石のように固くなった巨大な辜丸は南瓜のように少し平べったく、地面に座り込むとその上で鍋や釜、傘の修理から刃物研ぎまでこなし、その鮮やかな手際を見るのが村の子供たちの楽しみだった。仕事が終わるとおじーは、作業道具と一緒に大きな辜丸を一輪車に乗せて次の村に去っていく。破れた着物を着た小柄な後ろ姿を思い出して、ウシは懐かしさに目が潤んだ。徳正も足だけでなく辜丸まで腫れ出すのではないかと心配したが、幸いその気配はなかった。元々毛の薄い方だったが、今では脛毛もすっかり抜け落ちて、産毛に包まれた足は色まで緑が濃くなり、形といい、手触りといい、ハブの頭のような指が無ければ冬瓜すげいそのものだった。水は相変わらず規則正しく落ち続けていた。

大城の友人という医者が三名、水の検査に訪ねてきたが、ウシは家にも上げずに追い返した。大城は特に気を悪くした様子も見せずに往診にきてくれた。ウシも何も言わず、大根の黒糖漬けを少し多目に出した。徳正は熱も脈も安定し、軽いいびきを立てて眠る日が続いた。ウシは畑に出る時間を増やし、夜は大きな目のバケツを用意して、今まで通り自分の部屋で寝るようにした。

ベッドの傍に兵隊達が立つようになったのはその夜からだった。

寝たきりになった日からずっと徳正の意識は正常だった。眠っているように見えてもまわりの騒ぎは聞こえていたし、ウシと大城の会話も理解できた。しかし、言葉を発することとはできず、身振りや眼差しでウシに合図を送ることもできなかった。自分は脳がバカになって半身不随になってるやさや、と悲しくなったが、そのうち治るする、という持ち前の楽天的な気持ちもあって、訪ねてこないの腹を立てているであろう女達への詫び状を考えたりしながら時間を潰していた。

ウシが部屋に引き上げた後、まどろみに浸っていた徳正は、右の爪先にむず痒いような痛いような感覚を覚えて目が覚めた。点けっ放しになっている蛍光灯の光が眩しかった。